おわりに

筆者がテニアン島について初めて興味を持ったのは、８年も前になる２０１１年。当時小学生だった子どもと訪れた図書館の児童コーナーで、何気なく手にしたのが、テニアンと戦争について書かれた本だった。

児童書でありながら知らないことだらけ。自分の歴史知識の浅さを恥じるとともに、なぜか島のことが気になり、ある時、東京都内に住むテニアンの元住民の方に会った。その人がとても親切で、当時の思い出をいろいろ話してくれた。それからだ。テニアンの存在がどんどん自分の中で大きくなり、次第に引き込まれていった。

筆者が住む関東地方や東北地方のほか、沖縄県も何度も訪れ、元住民を探して取材を申し込んだ。その時点で戦後７０年近くがたっていたので、筆者が会ったのは元住民のごく一部だし、みんな戦前は子どもか２０歳前後の若者だった。ただなかには驚くべき記憶力で島の出来事を詳細に、具体的に語ってくれる人もいた。沖縄でも多くの人が、突然現れた見ず知らずの筆者を快く迎えてくれた。

強調したいのは、本書は筆者が書いたというより、元住民が残した多くの記録や文書、そして筆者が会うことができた人の証言をつないだものだということだ。

テニアンと日本の関わりは、沖縄県と同県の市町村が移民史の視点で大変詳しく調べ、貴重な資料を作成している。しかし、移民を送り出したほかの地域の調査や研究が沖縄ほど進まなかったこともあり、全国的視点でまとめた出版物がこれまであまりなかった。日本時代以前や戦後も含めたテニアンの歴史全体をとらえた本もほとんどなかった。

ただ、記録がないわけではない。多くの人が、サトウキビ畑での苦労、農場や町の仲間との懐かしい思い出、そして戦争で味わった地獄の出来事を、戦後、文字にしていた。親ぼく会の会報、同窓会誌、あるいは地域誌に寄稿した。他人の目に触れない個人的文章を書いた人は多いし、本を出した人も何人もいる。詩集や俳句集をつくった人もいる。

「太平洋に日本人が必死に生きた島があったことを知ってほしい」

「戦争は地獄だった。将来あんなことが二度と起きてほしくない」

言葉は人それぞれだが、この２つのメッセージが多いと感じられた。どの文書も自分たちの経験、テニアンの出来事を未来に伝えたいという気持ちは同じように思えた。

筆者は元住民に会う一方、彼らが残した文書を可能な限り集めた。その結果、目の前にテニアンの歴史を描いたジグソーパズルのピースが大量にあるような状態になった。本書の執筆は、それらを分かりやすい形に組み立てる作業だった。

「太平洋から日本を見つめ続ける島」という副題も、そんな執筆作業のなかで、自然に頭に浮かんだ言葉だった。

記録や文書を残した元住民たちも、戦後70 年以上がたち、再びテニアンが日本人の島になればよいと考えているわけではもちろんないだろう。日本人で賑わった日々が遠い昔の出来事になりつつある。元住民はそれも理解している。ただ、日本時代の記憶が全て風化し、消え去ってしまうとしたら…。戦後生まれの筆者も、それはあまりに悲しいことだと思う。

仲間と助け合いながら必死に働き、築いたものを戦争で全て失った人たち。テニアンで生きた日本人を描くことは、戦争という歴史の失敗を二度と繰り返してはならないというメッセージを今を生きる我々、そして未来の世代に伝えることだ。筆者はそんな気持ちにもなった。

「日本人よ、テニアンのことを忘れるなよ」「たまには思い出してくれよ」―。

島がそんな言葉を我々に投げかけている。そんな気すらしてきた。そして浮かんだのが、本書の副題だった。

筆者の個人的興味から始まった取材。本土、沖縄、そしてテニアン。取材を受けてくださった方々、協力してくださったすべての方に感謝したい。そして、本書の趣旨を理解し、出版の労を取ってくださったあけび書房の久保則之代表と清水まゆみさんにお礼申し上げたい。

そして、筆者の家族にも。仕事の休日を利用し続けた取材。毎回気持ちよく送り出してくれた家族には感謝しかない。

日本とテニアンの関わりを探る取材は、戦後７０年という時の流れが壁になることもあったが、可能な限りトライした。しかし、筆者の力量不足から掘り下げきれなかった部分が多数あるのも事実だ。現在のテニアンの社会、政治経済情勢をきちんと把握し、日本との関係を考えることも、今後の宿題として残っている。

テニアン、北マリアナ諸島がこれからどのような未来に向かっていくのか…。日本は太平洋の友人として、どのような関係を築けるのか…。テニアン取材は続く。

2019年6月18日　　吉永 直登